

国際 P2M 学会誌の電子化について

千葉工業大学 社会システム科学部 プロジェクトマネジメント学科 田隈 広紀

1. 電子化の経緯と当記事の目的

すでにお気づきの通り、当学会が発刊している有審査論文誌「国際 P2M 学会誌」は、Vol.11, No.1 より「J-STAGE」を利用した電子公開に切り替えさせて頂きました。

URL : <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjour/-char/ja/>



図1 国際 P2M 学会誌の J-STAGE サイト¹⁾

これまで論文誌・予稿集の公開に利用していた CiNii (サイニー) が 2016 年 3 月末より新規記事掲載の受付を停止したことをうけ、過去に発刊した記事 (バックナンバー) も順次 J-STAGE へデータ移行させて頂く予定です。

さて本件につきましては 2015 年度年次総会でご承認頂いた「デジタル化の推進」の一環として取り組んでおりますが、実際のところ冊子が配布されなくなったことで、ご不便を感じている方もいらっしゃると思います。よって本記事では J-STAGE というプラットフォームで記事が公開する主なメリットを紹介させて頂きたいと思えます。

2. J-STAGE による電子化のメリット

ご案内の方も多いことと思いますが、まず J-STAGE を紹介させて頂きます。J-STAGE は国内の電子ジャーナルの発行・公開を支援する Web システムです。このシステムに掲載された記事は、図 2 のように海外の様々

な電子ジャーナルサイト上の記事と相互リンクされ、各記事の引用・被引用の関係が図 3 のように示されるようになります。

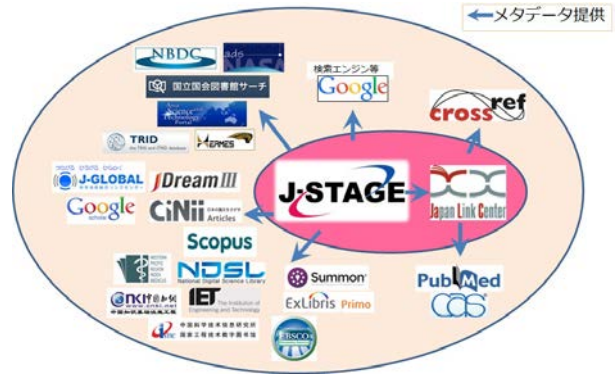


図2 J-STAGE と連携している電子ジャーナルサイト²⁾

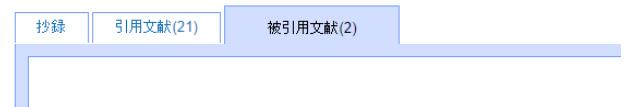


図3 J-STAGE 内の記事の情報タブ

図 3 の「被引用文献」のタブは他の記事から引用されることで表示されるため、このメリットを感じて頂くにはもう少々時間がかかりますが、研究者にとってご自身の研究論文が幅広く公開され、かつ誰に・どのように引用されているかを把握できることは、非常に有益と存じます。先日当雑誌の 11 月分のアクセス統計データを入手しましたが、11 月 11 日に公開してからたったの 20 日間で、アクセス数が 596 件、PDF ダウンロード数 (ダウンロードページが表示された件数) が 343 件も計上されていました。下記が特に件数が多かった国です。

- 1) 日本国内
 - ① アクセス数 : 169 件
 - ② PDF ダウンロード数 : 230 件
- 2) アメリカ
 - ① アクセス数 : 214 件
 - ② PDF ダウンロード数 : 55 件
- 3) 中国

- ① アクセス数：124 件
- ② PDF ダウンロード数：28 件

その他、ドイツ、オーストラリア、フランス、インド、フィリピン等の国々から複数のアクセスが計上されておりました。

またサイト内の検索機能や上記の引用・被引用のリンクを辿ることで、関連研究の調査も効率化されることと思います。図4は当学会誌内の詳細検索画面です。サイト内の右上にある「詳細検索」のリンクから利用でき、細かな検索条件を設定できます。



図4 J-STAGE の資料内検索の画面

さらに記事の閲覧は、PC はもちろんスマートフォンや Kindle 等のタブレットからも可能です。公開後半年以内の記事本文のダウンロードには、先日メールでご案内した学会共通の購読者 ID・パスワードが必要ですが、一度認証してあればブラウザの機能にて入力を省略できると思われまます（ただし年度末にパスワードを更新させていただきますのでご了承ください）。「目次」等の共通記事はオープンアクセス（誰でも閲覧できる状態）のため、例えば学術業績の審査の際に、非会員の審査員の方が論文掲載をチェックすることも可能です。記事本文のダウンロードも、公開日より半年後に全てオ

ープンアクセス化されます。ダウンロードした PDF は、印刷はもちろんテキストのコピー&ペーストも可能なため、論文ご執筆の際のお手間や引用ミスも軽減できると考えます。これも当然ですが、記事の「改変」は PDF 編集ソフトを用いてもできないようセキュリティの設定をしてあります。

3. 今後の展望とお願い

今回は論文誌の電子化に合わせてメリットを紹介させて頂きましたが、ゆくゆくは海外の研究者から P2M の有効性が認知され、著名雑誌から被引用を受け、インパクトファクター等の評価値が付与されるような将来像を描いております。もちろんこれには他に様々な施策が必要で、決して一足飛びに実現できるものではありませんが、今回の J-STAGE による電子化はその足掛かりとなり得ます。移行期ということもあり、種々のご不便をおかけすることもあるかと存じますが、それらを可能な限り受け止め、編集委員内で改善策を講じたうえで、この P2M マガジン等を通して発信させて頂きたいと存じます。今後とも是非当学会の刊行物にご注目頂き、かつ積極的なご投稿をお願い申し上げる次第です。

参考文献

- [1] 国際 P2M 学会「国際 P2M 学会 J-Stage サイト」
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/iappmjour/-char/ja/>
- [2] 科学技術振興機構「J-STAGE の位置づけ」
https://www.jstage.jst.go.jp/pub/html/AY04S030_ja.html